

命はどこへ行くのか

第7回 原理主義にあらざる慎重論

医療目的を掲げてクローン研究をしていこうとする推進派に対し、慎重派、反対派の理論はみえにくいところがある。総合科学技術会議生命倫理専門調査会メンバーも務め、日本人の生活観や文化に根ざした国民的議論の必要性を一貫して訴えている宗教学者の島菌進氏に、“原理主義的ではない慎重論”をお話し頂いた。

小林——いつもはクローン人間の是非からうかがうのですが、島菌さんがクローン技術全般に反対であることはわかっておりますので、なぜクローンに歯止めをかけなければいけないのか、そして歯止めのために有効な論理は何か、まずその二点をうかがいたいと思います。

島菌——それを今苦労して考えているところなんです。わたしは総合科学技術会議の生命倫理専門調査会にかかわっていますが、わたしの「原理主義ではない慎重論」は、その会における研究推進派の考え方に疑問をもつところから生まれまして。争点は基本的に「ヒト胚の研究利用」。要するにヒト胚からES細胞をとって病気を治す、あるいはその研究をするということですね。

生命の初期（受精卵）はまだヒトではないので、倫理的配慮は薄くてもいいという考え方もあります。しかし受精卵は将来人間になる存在で、その意味で大きなポテンシャルをもっている。また、さまざまな治療に役立つという意味でのポテンシャルもある。それだけに厚い倫理的配慮が必要だとわたしは考えます。

小林——受精卵の使用には厚い倫理的配慮が必要だとのことですが、基本的にそれは禁止されるべきだと考えますか。それとも配慮しながらであれば使ってもよいと考えますか。

島菌——原則的には禁止されるべきだと思いますが、絶対NOではないはずだとも考えます。というのは、ある種の病気によって苦しんでいる人が、他のどんな方法によっても救われませんが、この受精卵を用いることによって助かるかもしれないという場合。そうした極限的なケースにおいて、そ

の可能性をも排除せよとは言にくい。ですから原則禁止だけでも、例外的に許容される場合があり得ると考えていい。

小林——そう考えた場合、すべて例外の方に入ってしまうということは考えられませんか？ 多かれ少なかれ医学の研究は人を救うために行われますから。となると原則NOが崩れ、むしろ禁止すべきことの方が珍しくなってしまうことにはならないでしょうか。

島菌——そうならないよう、あくまで原則的には強い禁止を掲げ、非常に限定的な例外を許可するだけにすべきだと思っています。

小林——しかし研究する人は基本的に崇高な目標を掲げるはずですか。

島菌——そこにわたしは疑問をもっているんです。実際にそういう研究が広く開放されれば、特定の人を助けるだけでなく、さまざまな目的のために利用できるようになる。それは崇高な目的ばかりではない。

小林——しかしその線引きは難しいのではないのでしょうか。

島菌——科学のあり方を考え直すべきときにきていると、わたしは考えています。従来は、自由に研究し、競争し、だからこそ立派な成果が出てくる、だから科学は進歩すべきだと考えられてきたわけですね。しかし今や科学は非常に大きな力をもちました。自由な研究をさせておく問題が起り得る。生命科学はこれまでの文脈とは違う形で考えられなければならない。

小林——問題を整理します。先端医療の研究はリスクが大きい。だから倫理面からの監視をするこ

とで、チェック&バランスを心がける、そんな主張ですか。あるいは、そもそもそうした研究自体が人類にとって危うい。だから根本的に見直す。その場合、研究の封印の可能性まで視野に入れる、そんな主張ですか。

島園——後者に近いと思います。たとえば限定された機関でしか研究できないといったことは、他分野でもありますよね。そうした形で限定された機関が、競争的な環境とは切り離されたところで研究する。そういうことも考えなくてははいけないんじゃないか。もちろんそれは一国だけでは意味がない。国境を越えれば、ある国でできないことがこの国ではできるといようなことが、あつてはなりませんからね。だから国際的に抜け穴のない協定を結ばねばならない。

島園——先に何が起こるか分からない、だからまずやってみようという研究者がいる。しかし、もう動物でいろいろなことをやっているわけでしょう。マウスでやっていることを人間でやったらどうなるかということは、ある程度予想がつくはずですね。しかしそうしたことは必ずしも公にされていない。今マウスのES細胞を使ってやっていることを、全部リストにして挙げて、何が行われているか全部見せてほしい。そうすれば人間にやっってはいけないことがかなりわかるはずだ。残酷な実験もすべて知らせるべきだと思います。こうしたことが人間にも行われる可能性があるということ、検討すべきだと思います。

今まで科学は基本的によい目的のために進んでいると思われていた。だから科学を進めねばなら

ないという論法です。でも実際には、よい目的とともに、おぞましいことや危険なこと、倫理的に問題がありそうなことも引き起こしてきた。そういう可能性についてすべてあらかじめ検討することは、完全にはできないけれど、少なくとも予想がつくところまでは示すべきです。こうしたことは今までの科学になかったことですけれど、これからは考えられるべきだ。プラス面だけを見たあらゆることをやっつていい科学から、マイナス面を見定めてやっつていいことを限定する科学に、今移してゆかねばならない。

こういったことが今まで検討されてこなかった一つの理由は、欧米の生命倫理が個としての生命の尊厳にとられすぎてきたことがあると思う。しかし人間の生命を個の面からのみ捉える感覚は、ユニバーサルなものではないんです。たとえばES細胞は細胞ですから、個としての生命ではない。だけどES細胞がもっているポテンシャルは、非常に大きい。これをいじくることも人類の尊厳にかかわる問題が生じる可能性がある。

たとえばES細胞からキメラをつくるということがある。極論すれば人間と豚のキメラをつくるということだってあり得る。これは種の改変で大問題なわけですが、欧米的な個の概念では捉えきれない。だから個としての生命ということとは別に、種とか身体のレベルで考えなくちゃならないことでもあると思いますね。

それからある論者は、日本でES細胞に反対する人がいるけれども、妊娠中絶がこれだけ行われているではないか、胚よりもっと人間に近くなつた胎児を殺めることを許しているのに、なぜ人間



しまその・すすむ

1948年、東京都生まれ。東京大学文学部宗教学科卒業。東京大学大学院人文社会系研究科教授。総合科学技術会議生命倫理専門調査会メンバー、日本宗教学会会長。専門は近代日本宗教史。東京大学21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」拠点リーダーをつとめるほか、インターネット上で「いのちのはじまりと生命操作」と題する連載もおこなっている。
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/index.html>
<http://homepage2.nifty.com/jyuseiran/sapo/sima/sima000.html>

性が現れていない段階で殺めることが許されないのかという人もいますね。しかしこれは別種の問題です。妊娠中絶は利用のための決断ではありません。まず親に生活を維持していく困難があり、そのための決断なわけです。もちろんこれは倫理的にいいことではないけれど、そうした立場にある人の妊娠中絶という選択を、わたしは必ずしも否定できない。ところが受精卵には利用するという要素が入ってくる。この点は留意しなければならぬ。

それに、今行われようとしている研究は、個人の欲望に奉仕する側面をもっている。これは社会環境や道徳を含む人間の生態系を壊す可能性がある。ともに生きていくための知恵を無視する破壊的作用を起こす可能性がある。従来の生命倫理は、誕生時点における生命とは何かということを第一にして考えてきましたが、むしろ社会や環境とのつながりの中にある生命という観点からみてゆく必要があるように思います。

島菌教授が現在ひじょうに難しいところにいるということ、ひしひしと実感させられるインタビューだった。

先端医療を推進する側の論理は概ね明快かつ直截である。科学は進んでゆくものだ。人間の尊厳を損なう研究は禁止する。その危惧がある研究は、

倫理的な配慮を加えながら進めてゆく。

これに対して島菌教授の疑念は科学そのものに向けられている。が、科学の重要性を否定しきることでもない、その反対論は常に留保付きにならざるを得ない。それがもっとも端的に出たのは、ES細胞の研究に対して原則NOを唱えながら、それ以外治療法を考えられないケースにおいては許可せざるを得ないとした点である。これがたとえば、いかなる事情があろうともES細胞の研究は行われるべきではないとする「原理主義的反対」であれば、論理は明快かつ直截になろう。しかしそのような原理主義的な反対論を繰り返す際には、島菌教授は病苦に悩む患者への思いやりがありすぎるのである（あるいは理性的でありすぎると言ってもいい）。

第一線の科学者を含めて、科学の暴走を危惧する声は強くある。ただそのための方策が整えられていないのは、人類の科学への依存度に対する認識の差が大きいからである。科学者は人類の科学に対する依存度を大ととらえ、たとえば島菌教授のような人々は、環境や将来のリスクを考えた上で、科学への依存度を小さくしてゆくべきだと考える。どちらが真実であるかどうかは神のみぞ知る。しかし島菌教授の抱くような科学への危惧を共有する人々が年々殖えていることは否定できない事実なのである。

こばやし・きょうじ

作家。1957年兵庫県生まれ、東京大学文学部美学藝術学科卒業。84年に『電話男』でデビューして以来、実験的作品を次々と発表。98年、『カブキの日』で三島由紀夫賞受賞。以前からバイオテクノロジーに関心をもち、次作にはクローンをテーマにした作品を構想している。最新刊は『宇田川心中』（中央公論新社）。

